

原油価格急落の要因と今後

—世界経済にもたらす影響とは？

(一財)日本エネルギー経済研究所

常務理事 首席研究員 小山 堅

なぜ原油価格は急落したのか

原油価格は需給ファンダメンタルズに影響される。今回の価格急落は、需給が大きく緩和し、価格に強い下落圧力が発生したことが基本要因である。

2011年から3年半にわたり100ドル超の高原油価格が続いたことが、価格下落の最大の背景要因である。価格が高くなれば需要が抑えられ、同時に生産を増やそうとする力が働くからだ。

では、なぜ3年半も高い原油価格が維持できたのか。そこには、ある重要な要素が存在していた。すなわち、需給が軟化して価格下落圧力が発生しても、石油輸出国機構(OPEC)、中でもサウジアラビア(サウジ)が生産調整(減産)をして高価格を維持するだろうと多くの市場関係者が信じていたのである。産油国の多くは石油収入に経済を依存しており、高価格維持が必要である。特に中東産油国は2011年以降、「アラブの春」後の情勢流動化を受けて、国の安定・治安を守り、民心離反を防ぐため国民に対して各種給付をより手厚く

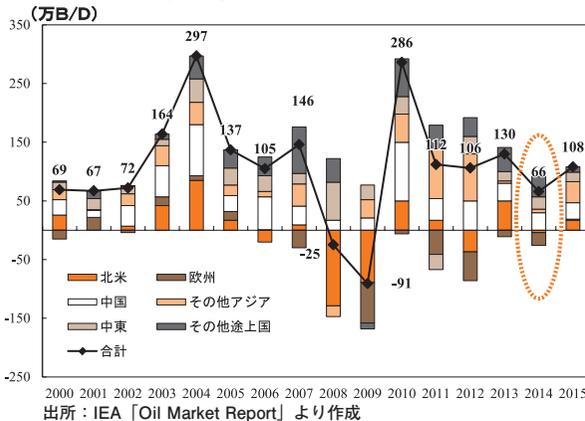
するための支出が増えた。その支出を賄う源泉が石油収入で、収入維持のためには高原油価格が求められ、同様の事情を抱えるサウジが調整役を果たしてくれるとの認識が共有されていた。

需給軟化しても減産しない OPEC

2014年は、石油の世界需要が過去5年間で最低の伸び率になった(図1)。一方、需要の伸びに対して3倍近い非OPECの供給増があった(図2)。なぜ供給が増加したのか。図2で明らかにように北米の伸びが大きかったからで、中でもアメリカが生産を圧倒的に増やしている(図3)。

アメリカの生産増加の要因は「シェールオイル」の大増産だ。シェールオイルは先進技術の開発・普及で急速に生産拡大ができたが、基本的にはコストが相対的に高い油である。高コストにも関わらず生産拡大できたのは、100ドル超の油価がずっと続いていたからだ。その結果、アメリカは前年比100万バレル/日以上の大増産を3年間も続けることができた。

(図1) 世界石油需要の増減



(図2) 非OPECの石油生産

